
とある古本屋の話

あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある古本屋の話

【Nコード】

N0860R

【作者名】

あゆみ

【あらすじ】

普通った古本屋。十年ぶりに覗いてみれば、そこには十年前と何も変わらぬ店と店主。
僕と店主の会話。

（前書き）

楽しんで頂ければ幸いです。

「ここ、本屋さん？」

その声は無邪気に、私へと向けられた。

そこには、見知らぬ少年が一人。年の頃は、七つか、八つくらいだろうか。

短く切り揃えられた黒いさらさらの髪に、何か分からないが戦隊もののキャラクターがプリントされたＴシャツ。どこかで転んだのか、短パンから覗く膝小僧がわずかに擦り剥いて赤くなっていた。

子どもらしいまあるい顔に満面の笑みを浮かべて、少年はにこりと笑った。一瞬、何が起きたのか理解が出来なかった。ここは、この場所は、決して見つからないようになっていくはず。知っているものにしか、私が呼んだものにしか、ここは見つからないようになっていた。

なのに、どうして。

どうしてこの少年はここに入ってこれたのだろうか。確かに、ここは本を扱う店ではある。古い本を集めては売る古本屋、神崎書店だから、私は少しときどきしながら、無邪気な問いに無言のまま頷いた。

この少年は、もしかしたら何か知っているのかもしれない。ここがどのような場所なのか。私の事を知っていて、私に何か危害を加えるつもりなのかもしれない。そんな事を思いながら、私は警戒心を持って少年を見つめた。けれど少年はそれに気付くそぶりさえ見せず、また楽しげに微笑んだ。そして、あのね、と言葉をつづけた。

「あのね、ぼくね、かんじ読めたんだよ。おもての、かんばんのかんじ！」

かみさきしよてん！

胸を張り、まるで『すごいでしょ!』とでも言うように。自信満々に続いた言葉は、ほんの少しだけ間違っていた。

どうにも警戒心を持つ事が馬鹿馬鹿しいように感じて、笑ってしまっただ。

「『かみさきしよてん』ではなく、『かんざきしよてん』だよ。ちよつとだけ惜しかったね、坊や」

笑いを堪えようとしても、くつくつと小さく声が漏れてしまう。

嗚呼、全く。なんて面白い子どもなのだろう。

ばってんだった?

両手の人差し指でバツ印を作りながら、少し残念そうに小首を傾げる。その姿は、まるで小動物のようだ。感情豊かな、八の字に下がった眉が可愛い。

「半分ばってん。だけど、もう半分は丸」

「ほんと? 半分まる?」

目をキラキラさせて、近づいてくる。なにをするのかと思えば、ちよこんと座る、膝の上。古本屋の、会計台。とは言え、狭い座敷に小さな机と座布団を置いただけの簡素なものだ。少年はその小さな机を少し端に寄せたと思うと、何を思ったのか私の膝に腰を下ろした。

「ねえ、おにいさんはなんて言うの」

その言葉に、私の名前かい? と問いかける。少年は声には出さず、こくん、と頷いた。そして、くたりと凭れかかってくる。

「名前、そうさねえ……」

どうしようかと、少しだけ悩んだ。けれど、安心しきったような少年のその仕草に、何を悩む事があるのか、と本当の名前を教える事にした。

「私は喜咲と言った。神崎 喜咲」

「きさきさん?」

繰り返す声は、小さな子特有のボーイソプラノ。その可愛い響きで自分の名を呼ばれるのがなんとなくくすぐったいような気持ち

ちになってしまつて、照れ隠しに少年の頭を撫でてやった。髪をくしゃくしゃにしてやると、少年はきやあきやあと笑つて喜んだ。人間の子どもを相手にするのは初めてだったが、何だか暖かくて、ふわふわして、切なくなつた。

「あのね」

少年は無邪気に笑つた。

「明日もあそびに来るね！」

ああ、なんで、どうして。どうして、こんなにも優しい。何故だか泣きそうになつて仕舞つて、声が出なかつた。私は少年を抱きしめ、頷いた。

ああ、今頃になつて気がつくなんて。

愚かな自分に、溜め息を吐いた。

私は、傍に居てくれるぬくもりを、愛してくれる誰かを求めていた。なんで、どうして。こんな事、気付きたくなんかつたのに！

1

古くて小さな、一軒の古本屋。

昔ながらの木造建築、神崎書店。

店の前を小さな車が通るだけで屋根がきしきしと音を立て、わずかに揺れる。中に入れば古い紙とインク、そしてわずかなカビの匂いが鼻腔をくすぐる。中に入れば、床から天井まで、分厚い本でみっしりと埋まっている。少し窮屈ではないかと感じられるほどに並んだ本棚の奥。彼はいつも、そこに居た。

古本屋の主、神崎 喜咲。

「おや、よく来たね」

僕を見れば、彼はいつもそう言つて迎えてくれた。機嫌の悪そうな表情で、けれど口元の笑みがいつも隠し切れていなかった。それがなんだか淒く可笑しくて、僕はその表情を見る度に笑いをこらえるのが大変だつた。

彼はいつも、機嫌の良い時にはジュースやお菓子を振る舞ってくれた。そして、私が死んだらこの店は君にあげよう、などと嘯いていた。

色素の薄い、髪と肌。時代を間違えているのではないかと思わせる着物姿。彼が好んで着ていたのは、たしか若草色着ものだった。それに横縞の帯と格子柄の藍の羽織をよく身につけていた。ぴしりとした襟元から伸びる細い首は、触れば折れてしまいそうなほどで、彼はとても儂い、小さな花のような人だった。

「死んじゃうの？」

私が死んだら。そう言われる度、僕は心配になつて聞いたものだった。問う度に彼は、そりゃあいつかは死ぬだろうさ、とからから笑い声を零していたけれど。からかうように紡がれるその言葉は、けれどどうしてか、いつも真実味を帯びて僕の心に入ってきていた。もしかしたらこの人は本当に近いうちに死んでしまうのかもしれない、なんて。そんなことまで思ってしまうくらいに。

彼の声は 特に、からからと楽しげに零れた笑い声は、とても綺麗だったように思う。もちろん男性の声だ、鈴の鳴るような、という表現は決して似つかわしくない。女性のような可愛らしい声ではなく、穏やかで、落ち着く、子守唄を聴いているような気持ちになる声だった。例えるならば、軽やかな風のささやき。もしくは優しい雨の音。

僕は彼に、とても懐いていた。

当時、僕は八歳。他の子たちがゲームなどで遊んでいる間、僕はその古本屋に入り浸っていた。彼と話をしている事もあれば、本を読むこともあった。座る場所はいつも決まって、彼の膝の上。彼に背を預ける度にその細さに驚き、そして女性のようなだと思っていた。彼は、そう。まるで女性のようにほっそりとしていた。

そう言えば、僕はあの店で金を払った事がない。訪れる度に入れ替わる書籍を眺め、目新しい本を手に取り、彼の膝に座り、本を読む。あるいは、彼との世間話に花を咲かせる。毎日がその繰り返し。

まるで図書館で本を読むように商品を手取る子どもを、彼は良く叱らなかつたなと今になって良く思う。

そして、あれから十年。

親の転勤で一度は離れた土地だが、大学進学のために、僕は戻ってきた。これからは念願のひとり暮らしだ。一通り町内を歩き回り、やはり十年もたてばいろいろ変わるものなのだなと懐かしさ半分、切なさ半分の溜め息をひとつ吐く。

けれど、せっかくだからと訪れた古本屋はそこだけ時代が止まったように、のんびりと店を開いていた。

「おや、よく来たね」

十年前と少しも変わらない容姿。時代錯誤な着物姿。相変わらずの、細い首。深い青の着物に、黒と白の縞柄の帯。帯と同柄の羽織と浅葱色の半襟が洒落ている。着こなし方も、好みの色も、彼は本当に変わらない。

変わったところと言えば、小さな猫を膝に乗せている事くらいだろうか。かつては僕の専用席だった所は、小さな猫に奪われていた。とは言え、この年になってまで彼の膝をねだるつもりはないけれど、真つ黒な猫は退屈そうに僕を見やり、ふああ、とひとつ欠伸をした。白くて細くて今にもぽつきりと折れてしまいそうだと思っていたのに、彼は変わらず、古本屋の奥に座ってほほ笑んでいた。

「……妖怪、だったんですか？」

「おやおや、相変わらずだねえ、君も」

からからと楽しげに笑って、彼は言った。

「狐だの何だの言う輩も時折いるけどね、私はしっかり人間様だよ。ほら四足で歩きまわったりなどしないだろう？」

ねえ、喜績。そう続けて、彼は猫の喉元をくすぐった。猫の名は、“キセキ”と言うらしい。猫へ向けられる言葉達は、いつもより少し高い声で紡がれる。

「いや。それにしだって、もう少し老け込んでも良いとは思いませんか？」

「それは私に早く死ねと言う事かい？ ああ、これだから最近の若い者は。恐ろしや、恐ろしや」

楽しげに身ぶるいしてみるその様だけは、以前よりも年を取ったのだろつかと感じさせた。どう見ても、若者をからかって遊ぶ狸爺だ。どうやら彼は、年の取り方を間違えてしまったようだ。

「今年、お幾つになるのですか？」

「はて、百か二百か……。幾つだったかねえ」

忘れてしまったよ、と首を傾げてはぐらかす。どう見たって十代半ばか二十代後半のその容姿で、訳のわからない事を言う。いやしかし、十年前から彼は変わらず二十代なのだ。気になるが、彼は何度聞いても教えてくれない。

「ああ、そうだ。それじゃあ、干支だけでも教えてくださいよ」

「確かねずみだったかな」

子年。ならばぱつと見、二六才が妥当なところか。しかし、そうなると十年前は一六だったという事になる。これは絶対にあり得ないと言う事は三八歳？ 見えないが。

「三八歳？」

「外れ。そんな事より、こつちへおいで。お茶とお菓子を出してあげよう。今日は機嫌が良いからね」

……じゃあ五十歳？ そんなまさか。と言う事は、巳年だと言うそれ自体も嘘なのだろうか。

「何をぼんやりしているんだい？ まさか私より早く耄碌したなんて言わないでくれよ？」

ああ、全く。いつもこうやってはぐらかされる。不老の店主はからかうようにそう言つて、にんまりと口角を上げた。僕はその言葉に、少しだけ唇を尖らせて良い返す。

「本当、いちいち腹の立つ人ですね」

言いながら、けれど悪い気はしない。十年前も生意気だの何だのと言われ続けていたからか、どうにも苛立ちよりも懐かしさが勝つてしまう。

「ほら、お食べ」

出されたのは、真っ赤な苺の乗ったショートケーキと、白く湯気の立つ琥珀色。香り高いその紅茶は、ひどく甘い、バニラのような香りがした。

それにしても、昔はオレنجジュースと駄菓子の類だったのに。この人はこんな小洒落たものを出してくるような人だっただろうか。

「何、失礼な事を考えているんだい？」

「やはり妖怪だったんですね」

何故考えている事が分かったんだ。

「お前は考えていることが顔に出過ぎなんだよ。ふふ、お前の考えている事くらい、聞かずともお見通しさ」

どこか楽しげに言つて、彼はほれ、とフォークを僕の方に寄せた。そして少し疲れたように眉を寄せ、目を閉じた。

「さっきまで昔馴染みが遊びに来ていてね、これを置いて行つたのさ。私が洋菓子をあまり好いてないのは、奴も知っているだろうに」

「それはきつと貴方への嫌がらせか何かでしょう」

「ああ、違いない」

うにゃあ、と彼の膝に居る黒猫が、相槌を打つようにひとつ鳴いた。それを優しい瞳で眺めながら、彼は今に見ている、などと悪役のような台詞を吐く。そして優雅にティーカップを手に取り一口すすった。容姿だけなら、儂く可憐。それはまるで、散り際の桜のような美しさ。彼の姿は実に絵になる。それを横目に、僕は出されたケーキに手を伸ばした。

「あ、美味しい」

一口食べて、思わず呟いた。甘さ控えめで、くどくない。たつぷりとクリームの乗ったその見た目に反し、その味は軽く爽やかだ。一口目を飲み込まないうちから、次のもう一口分をフォークに取った。端から崩されていく白いケーキは、ほろりとスポンジの色を覗かせる。

「ふふ。やはりこの類の菓子は子どもに食べさせるに限るな。実はま

だ、三切れほど残っているんだ。全部処理して行ってくれと有難い」

楽しげに微笑みながら、彼は言った。ああ、なんだろうこの光景。凄く見覚えがある。

「いや、幾ら美味くてもさすがにそこまで空腹じゃないですよ」

……ああ、そうだ。これは、あれだ。孫の為にお菓子を大量購入し食べきれないほどアレもコレもと出してくるお爺ちゃんの図だ。

「そうか……。じゃあ、どうやって処分すればいい？ さすがにこのままゴミにする訳にも行くまい？」

眉を寄せ、本気で困った顔をする。そこまで苦手なのか、洋菓子の類。原因は生クリームだろうか。確かに和菓子にはない油分の多さは、苦手とする人も多いかもしれない。けれどこのケーキは例外と言って差し支えないくらいに美味しいのに。いい年をして、食わず嫌いとはもつたない。

「それじゃあ、僕が持って帰りますよ。友達に食べせます」

「そうかい？ そうして貰えると助かる」

ほっと、息を吐く。

腐らせるのは忍びないからねえと申し訳なさそうに微笑み、彼はまたティーカップに口を付ける。そして、今持ってくるからねと膝から猫を降ろして立ち上がり、会計台の奥、のれんの向こうに歩いて行った。猫はにゃあとひとつ鳴き、その後に着いて行く。

申し訳ないのはむしろこちらだ。八歳の子どもならまだしも、僕はもう一八なのだ。貰うだけ貰って何も返さずに帰るなど、そんな失礼なことは出来ない。今度、和菓子の詰め合わせが何か、土産に持ってくることにしよう。

「余計な気なんか回すんじゃないよ」

驚いて、視線を上げる。いつの間に戻ってきたのか、彼は可愛らしいピンクと白のケーキの箱を手にとつと佇んでいた。それを僕に差し出すと、彼は笑いを堪えているような表情で座布団に膝をついた。猫は戻ってこなかった。

「子どもが変に気なんか使ってもんじゃないよ。そんな聞き分けの良い子ども、私は好きじゃないんでね」

「じゃあ気は利かせずに、有難く頂きますよ」

変わらないなあ、と思う。

昔から、なんだかんだと理由を付けては土産を持たせて帰すのだ、この人は。不服そうな表情で、礼なんかいららないよ、などと言いながら。ぶっきらぼうで、邪険にしているようで、その実、子どもが大好きなのだ。一八にもなって子ども扱いをされるのは少々腹立たしいが、この人が相手だとどうしてか仕方がないような気にもなる。不思議だ。

「ねえ、貴方は本当に幾つなんですか？」

「ああもう、しつこい男だねえ。だからさっき、言ったじゃないか。百か二百か忘れてしまった、って」

「信じられない答えなら問い直す。学生の持つ性質としてこれほど相応しいものはありませんよ」

「難儀だねえ」

顔を見合わせ、互いに笑みを浮かべた。

「別に何歳だって良いじゃないか。ひとの年齢なんて、そんなに気にするようなものじゃない。……ああ、そうだ。もう面倒だし、これより先、私の年齢を聞いてきたらこう答えることにしようかね。」

『私は永遠の二〇歳さ』ってね」

とびきり可愛らしくそう言ってやるよ、と彼は楽しげに口角を上げた。その様子に、僕もにやりと口角を上げて微笑み返す。

「それはそれは。じゃあ僕が貴方より年上になった暁には、存分に可愛がってあげましょうね」

「おやまあ、それは楽しみだねえ。それじゃあ可愛い年上のお子様の為に、減らず口の練習でもしておこうかね」

くつくつと声を漏らす様を見て、やはりこの人は狸爺だ、と改めて認識する。こんな若々しい容姿の人に使うには少々不自然な言葉かも知れないが、しかしそれ以上に相応しい単語が見つからない。

とは言え、本人も百歳越えを主張している訳だし、問題はないだろう。

「じゃあ、そろそろお暇します。見たところ面白そうな本も幾つかあるようですし、今度は本を買いに来ますね」

「そうかい。じゃあ期待して待つていようかね」

良い金づるが出来たねえ、と彼はにやりと笑った。それは思っても言わないのが礼儀だろう、などと思わないでもないが、この人が無礼なのは別に昨日今日始まった訳じゃない。三つ子の魂とも言ったところで素直に改めるような人でもあるまいし、仕方がない。ここは広い心で受け止めてあげるのも、次世代を支える若者としての義務だろう。

「それじゃあ、また」

「ああ、またおいで。お前はここの後継者なんだからね」

その言葉に、覚えていたのかと少し驚いた。分かりましたと小さく頷いて、店を出る。

「え？」

僕の前を、小さな子どもが一人、通り過ぎた。それは、良く見憶えのある、懐かしい、男の子。

…… あれは、

「…… 僕？」

いや、まさか。

不思議な事もあるものだ。まるで八歳の時の僕に良く似た男の子が、僕の横を通り過ぎて行くだなんて。

「本当、不思議だ……」

ひとつ頭を振って、僕はこれからひとりで暮らすことになる家へと向かい、歩きだした。

「ねえねえ、喜咲い。どうしてあの子は食べちゃだめなのー？」

「だって、可愛いじゃないか」

その言葉に、少年はぷう、と頬を膨らませた。まるで餌を詰め込み過ぎた栗鼠か何かのようなその様を見て、喜咲は良く膨らむほっぺだこと、と桃色の頬を両手で挟みこんだ。その手に少し力を入れると、少年の小さな口から、ぶしゅう、と空気が抜ける。

「美味しそうなのに」

つんと尖らせた唇のまま、少年はつままない、と呟いた。

「美味しそうでも、つまなくても駄目。あの子にはこの店を継いでもらうんだから、我慢して。出来るだろう？ お前は良い子だもの。ね、喜績」

「……分かった」

悔しそうに言っ、喜績、と呼ばれた少年は喜咲の膝の上にちょこんと座った。膝を抱え、丸くなって座る様は、懐っこい飼い猫のようだ。

「抱っこ」

「はいはい」

仕方がないねと呟いて、喜咲は少年をぎゅっと抱きしめた。喜咲の臀部から生えた二本の長い尻尾が、まるで猫じやらしのようにふわふわと揺れている。少年はそれにじゃれ付きながら、頭部から生えた黒い三角の耳をぴこぴこ揺らした。

「あの子には……あの人間には、この店が見えているんだよ。そのこと自体、信じられないことなのに……」

あの子は私を好いてくれているようなんだ、と喜咲は寂しげに微笑んだ。

古くて小さな古本屋、神崎書店。

張り巡らされた結界が、いつも店を守っている。此处は、喜咲の許したもの以外は入れないように作られていた。

喜咲の知人や、友人。あるいは、餌と呼んだ人間や動物たち。もっとも、『人間』も動物の域を出ないけれど。

ともかく、許しを得ていないものには、入る事が出来ず、店自体を見ることすらできない。呼ばれていない人間がこの店に来るなど、本来はあり得ない事だった。なのにどうしてか、たったひとり例外が居た。その例外はこの場所が好きだと言って満面の笑みを浮かべ、また会いに来るねと手を振った。

その笑顔が、堪らなく愛しかった。

愛しくて、恋しくて、傍に置いておきたいとまで思ってしまった。妖しの身でありながら、人を喰らい生きる身でありながら、その実、愛してくれる人を求めていたのだ。ああ、なんて矛盾した思考だろう。

「ああ、喜績」

「なあに？」

「私は、なんて嘘つきなんだろうねえ」

人ではないのに人の振りをして、人を喰らいながら愛して欲しいと呟いて、好いてくれた人には事実を語らず、誤魔化してばかり。

「なんて酷い、生き物だろうねえ」

「喜咲……」

抱きしめる腕に力を込め、喜咲はひとつ、涙をこぼした。私は長く生き過ぎた。そう、呟いて。

少年はわずかに目を細め、喜咲の背を撫でていた。大丈夫、大丈夫と心の中で呟きながら喜咲の涙を拭い、そして、気付かれないようにひとつ、涙を零した。

愛しい人が、ひとりの人間に心を奪われた。自分を見てくれなくなった。少年は喜咲の背に腕を回し、しがみつくように、縋りつくように抱きしめた。

ああ、なんで、どうして。

ねえ、どうか、おねがい。

僕を、見て。

僕を、愛して。

伝えたい言葉は沢山あった。けれど言えるはずもなく、少年はひとり、喜咲の胸の中で嗚咽を飲み込んだ。

誰か、どうか、僕たちに喜びを……。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0860r/>

とある古本屋の話

2011年2月21日12時55分発行